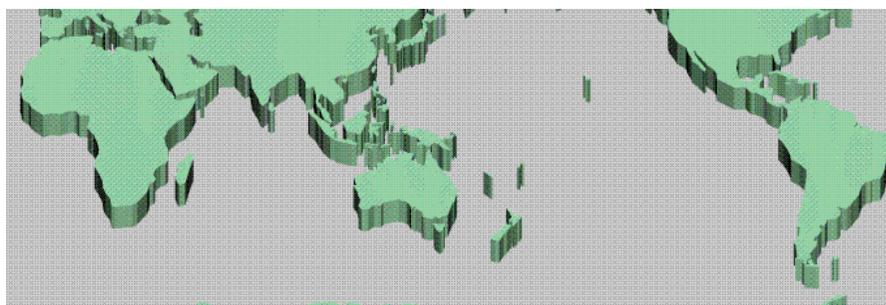


ニュースレター 第 10 号

2011 年 1 月発行

科学研究費補助金基盤研究 (A)

大学における宗教文化教育の実質化を図る システム構築



目 次

1. 2010 年度第 3 回全体会議報告	2
2. 2010 年度第 4 回全体会議報告	3
3. 報告	4
4. 第 5 回宗教文化の授業研究会	7
5. 成果発表会	7

1. 2010 年度第 3 回全体 会議報告

日時：2010 年 10 月 2 日（土）13:00 ～
14:30

会場：國學院大學学術メディアセンター 5 階・
06 会議室

出席者：研究代表者の星野英紀氏（大正
大学教授）のほか、研究分担者、連携研
究者、研究補助者を含め、計 19 名

議事内容

井上順孝氏より、以下の議案が提起されて
意見交換がなされた。

(1) 12 月 11 日の公開講演会およびワー クショップの告知

① 講演会 13:00 ～ 14:20

井門隆夫氏（ツーリズム・マーケティング研
究所 主任研究員）「観光と宗教（仮）」

場所：國學院大學学術メディアセンター 1 階・
常磐松ホール

② ワークショップ（案）14:30 ～ 17:30

「宗教文化教育の教材をめぐって」

場所：國學院大學学術メディアセンター 5 階・
06 会議室

14:30 ～ 15:30 第 2 グループ共同発表「共
同開発できる教材とは」

15:45 ～ 17:30 指定討論者によるコメントと全
体討論

司会：星野英紀氏

ワークショップでは、現在作成中の宗教文
化関連の映画や世界遺産のリスト、教科書に
おける宗教に関する用語等に関するデータ

ベースについて報告する予定である。

③ 第 4 回全体会議の日程について

12 月 11 日に、國學院大學学術メディアセ
ンター 5 階・06 会議室で開催予定であるこ
とが示された。

今年度、最後の全体会議となり、報告書や
その他庶務について話し合う予定であるこ
とが告知された。

(2) 最終成果報告について

本科研 3 ヶ年の成果報告については、「紙
媒体 + DVD」のかたちで発行予定であるこ
とが説明された。

① 全体の報告書

本取組全体の成果報告は、紙媒体で刊行
し、おもに下記の 3 点を中心にまとめること
になった。

- ・ 3 年間の研究・調査の概要
- ・ システム構築に関する議論の整理
- ・ 研究成果についての紹介（アンケート報告
書、国際研究フォーラム「映画の中の宗教
文化」の報告書、国立民族学博物館での国
際会議の概要など）

なお、報告書の分担については後日あらた
めて依頼することや、作成データの提出締め
切りなどについても告知された。

② グループ別の成果報告（CD または DVD を 3 枚程度）

第 2 グループ

第 2 グループは、宗教文化教育の教材と
なりうる資料を収めた DVD を作成し、基本文
献案内、映画のリスト、世界遺産と宗教文化、
高校の教科書に登場する宗教関連の用語な
どが収められる予定であることが報告された。

第3グループ

カリキュラムの調査等を行ってきた第3グループの成果報告に関しては、それほどのデータ量にはならない見込みであるためCDで作成したいとの要望が出され了承された。

第5グループ

第5グループは、外国から来ている宗教のデータベースとその画像等が収められたDVDを作成する予定であることが確認された。

なお、これらのDVDは全体報告書と同時に発行する計画であり、そのための作成スケジュールが取り決められた。

(3) その他

その他、宗教文化教育推進センターに関わる諸事項についても検討された。

宗教文化士資格の倫理規程について話し合わせ、資格の規程の中に、資格の悪用禁止や罰則といった倫理規程関連の条項を盛り込むことを、センターに求めることとなった。

次に、宗教文化士の認定試験のあり方について、議論された。選択式の問題によって到達目標の達成度をはかるので、設問がそれに対応した内容になっていることが求められる。この点については具体的な問題例について議論が交わされた。

最後に、宗教文化教育推進センターの準備室、ホームページ等について説明がなされた。現在作成中のホームページのレイアウト、構成内容について、実際に紹介され、改善の要望があれば、対応するとされた。

2. 2010年度第4回全体会議報告

日時：2010年12月11日（土）18:00～18:50

会場：國學院大學学術メディアセンター5階・06会議室

出席者：研究代表者の星野英紀氏（大正大学教授）のほか、研究分担者、連携研究者、パイロット校からのオブザーバー、研究補助者等を含め、計27名

議事内容

井上順孝氏より、以下の議案が提起されて意見交換がなされた。

(1) 宗教文化教育推進センターの件

「宗教文化教育推進センター」の英文名と略称が、下記の通りに報告された。

英文名

Center for Education in Religious Culture (CERC：略称「サーク」)

次に、「宗教文化教育推進センター規程」について検討がなされた結果、「監査」2名の設置を追記することとなった。また、倫理規程に関わる条項は、資格取得者の「行為」に関する規程であることが明確となるような表現とすることとなった。

また、下記の点について議案が示されて、検討がなされた。

・組織

センターの組織（センター長、事務局長、運営委員、研究員）の原案や現在作成中の

ホームページが紹介された。

・ 設立記念式

設立記念式が、2011年1月9日（日）に國學院大學学術メディアセンターで開催されることが告知された。

・ 第1回試験について

場所：國學院大學、東北大学、北海道大学、皇學館大学、天理大学、関西学院大学を会場とする予定であることが示された。

日程：2011年6月26日（日）を予定

試験の監督は、開催大学の関係者のほか、サークの事務局のスタッフが協力して行う。

その他：合格発表は、「7月下旬」までに郵送で通知するという日程案が示された。

なお、全体の受験者数や合格者数については、ホームページで公表することとなった。

(2) 報告書の件

科研全体の報告書の作成については、原案をもとに各グループの幹事が中心となって作成することとなった。

また、グループ別の報告は、第6グループの国際シンポジウム（2009年8月開催）の成果は別途冊子のかたちで刊行し、その概要を全体報告書に記載することとなった。他のグループの報告書は、DVDもしくはCDで発行することがあらためて確認された。

そのうえで、全体報告書および各グループの報告書の原稿提出の締め切りや、刊行のスケジュールが決められた。

(3) その他

決算の締め切り、次年度の計画、「パイロット校」という呼称を「参加校」に改称するといった件が話し合われた。

3. 報告

(1) 公開講演会

演題「現代イスラームと日本社会」

講師：小杉泰氏（京都大学教授）

日時：2010年10月2日（土）15:00～17:00

場所：國學院大學学術メディアセンター1階・常磐松ホール

* 國學院大學研究開発推進機構の主催、本科研が共催

小杉氏はエジプトに留学した体験などをもとに、イスラームの信仰がどのように生活に根付いたものであるかを具体的に説明した。そのうえで、日本社会がイスラームやムスリムについて、よりの確な認識をもつ必要性について、提言を含め解説がなされた。講演後、会場からの質問にも対応がなされた。参加者は約200名で、非常に好評であった。

(2) 国際研究フォーラム

テーマ：「イスラームと向かい合う日本社会」

日時：2010年10月3日（日）10:00～17:30

場所：國學院大學学術メディアセンター1階・常磐松ホール

パネリスト：

・三木英氏（大阪国際大学）「モスクが来た街：地域住民のイスラーム『受容』」（日本語）

・Isam Hamza氏（エジプト、カイロ大学）「イスラームは日本の宗教になり得るか」（日本語）

・Salih Yucel氏（オーストラリア、モナッ

シユ大学) "Is Islam part of the problem or solution?: An Australian immigrant experience" (英語)

・ Gritt Klinkhammer 氏 (ドイツ、ブレーメン大学) "Germany - Problems and developments of religious and cultural Integration" (英語)

・ 中西俊裕氏 (日本経済新聞社) 「イスラム世界との絆——広がる交流のすそ野・産官学を軸に」 (日本語)

・ コメンテータ: 師岡カリーマ・エルサムニー氏 (慶應大学、獨協大学、アナウンサー)

・ 司会: 井上順孝氏 (國學院大學)

* 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催、本科研が共催

内容

三木氏は、調査対象に選んだ大阪にある2つのモスク (大阪モスクと大阪茨木モスク) の事例を紹介しながら、ムスリムと地域住民との目立った摩擦はないとした。そのうえで、モスクに来る人と地域住民との交流は、モスク外にそうした場を設けたほうが円滑ではないかという見解を示した。

ハムザ氏は、イスラームの基本的考えと、明治以来の日本とイスラームとの関係について私見を述べ、「日本型のイスラーム」が形成されることが、イスラームが日本に受け入れられる条件になるのではないかとした。

ユージェル氏は、オーストラリアのムスリムの現状について簡単に説明したのち、オーストラリア移民の事例から日本社会が何を学びとれるかを考えてほしいと述べた。宗教ごとの違いよりも、互いの共通性に目を向ける時代に

なったのではないかと主張がなされた。

クリンカマー氏は、ドイツにおけるムスリムの置かれた状況、とくに移民の二世たちの状況について説明した。現在ドイツには四百万人程度のムスリムがおり、その半分くらいは市民権を得ているとした。二世たちがなかなかドイツ社会に溶け込まないということが指摘された。しかし、新しいネットワークも形成されており、こうしたものが将来の共存への助けになるのではないかとした。

中西氏はバーレーンに赴任した経験などをもとに、政治、経済面でのイスラーム国との関係の重要性に触れた。とくに、産・官・学の連携による関係構築の必要性があるとした。

全体討議では、エジプト人の父と日本人の母をもつ師岡氏からコメントがなされた。日本人のムスリムに対する態度と同時に、ムスリムが日本社会において、自分たちの理解者を増やしていくためには、どのような心構えが必要かという点についても、私見が述べられた。

日本でムスリムへの排除があまり見られないのは、遠い国から来た人として受け止めているのではないかと、異文化への強い好奇心があるのではないかとする一方、日本人がムスリムになった場合には、違う態度になるのではないかと、など体験に基づいた鋭い指摘がなされた。

各発題者から師岡氏の質問に対する応答がなされ、次いでフロアからの質問をめぐって議論がなされた。イスラームは進化論をどう扱うのか、「9・11」をどう理解したらいいのか、というような根本的な問題を含め、いくつか興

味深い質問がなされた。

フォーラムには百名近くが参加した。フォーラムの様子は、スカパー！の精神文化映像社の番組（216チャンネル）で、2011年1月12日、26日に、それぞれ一時間番組として放映された。

(3) 講演会とワークショップ

日時：2010年12月11日（土）

①公開講演会 13:00～14:20

演題：「観光と宗教」

講師：井門隆夫氏（ツーリズム・マーケティング研究所 主任研究員）

場所：國學院大學学術メディアセンター1階・常磐松ホール

②ワークショップ 14:30～17:45

テーマ「宗教文化教育の教材を探る」

発題 第2グループ共同発表「構築中の教材とその展開をめぐる」

報告者：

井上順孝氏（國學院大學）「全体の概要報告」

加瀬直弥氏（國學院大學）「宗教文化理解に向けた博物館等の利用法」

平藤喜久子氏（國學院大學）「高校教科書の宗教用語DB」

星野靖二氏（國學院大學）「リストの活用について」

コメンテータ：井上まどか氏（宗教情報リサーチセンター）、木村敏明氏（東北大学）、土井健司氏（関西学院大学）、弓山達也氏（大正大学）

司会：星野英紀氏（大正大学）

場所：國學院大學学術メディアセンター5階・06会議室

内容

講演では、井門隆夫氏がツーリズム・マーケティング研究の経験を踏まえ、宗教文化と観光が具体的にどのような形でつながっているかについて、具体的な事例を数多く示しながら、説明がなされた。

たとえば長野市において、ホテルがクリスマスを家族客のイベントとして利用した例や、神社と連携して雛人形を供養するイベントが成功した例などが紹介された。生活に密着した宗教文化のもつ力について、興味深い事例であった。

ワークショップでは、第2グループが行ってきた教材研究の成果が発表された。オンライン教材の必要性を認識した上で、世界遺産と宗教に関するデータベース、映画と宗教に関するデータベース、高校の教科書にみられる宗教文化関連の用語データベース、宗教文化を学ぶに適した博物館・美術館のデータベースなど、構築中のデータベースの紹介がなされた。

さらに最近のIT技術を使い、動画を教材としてとり入れる構想についての議論もなされた。

発題後、参加者からこうした教材の利用をめぐる問題、より多くの教員の利用を可能にするためのシステムについて、さまざまな意見が提起された。

4. 第5回宗教文化の 授業研究会

日時：2011年1月8日（土）15：00～
18：00

場所：國學院大學学術メディアセンター5階・
会議室06

テーマ：「ニュージーランドにおける宗教文化
教育」

発表者：Erica Baffelli氏（ニュージーランド・
オタゴ大学教員）

内容

バッフェリ氏は、ニュージーランドにのオタ
ゴ大学で宗教学を担当している。イタリア人
であるが、日本に留学した経験もある。

オタゴ大学における宗教文化教育がどのよ
うなカリキュラムであるか、またニュージーラ
ンド独特の問題としてどういうものがあるかにつ
いて、細かく発表した。

日本の宗教文化について説明する場合に
は、教材が不足するので、日本においてオン
ライン教材が開発されると、自分のような立
場の人間にとっては、大変便利であるとい
うことが述べられた。

またニュージーランドでは、マオリに対する
配慮が常に求められるので、それが教員に
とつてもかなりの負担になっているということが
報告された。

5. 成果発表会

【日時】2011年1月9日（日）11：00～
12：20

【会場】國學院大學学術メディアセンター1
階・常磐松ホール

【成果発表】

土屋博氏（北海道大学名誉教授）

井上順孝氏（國學院大學教授）

【今後の課題】

星野英紀氏（大正大学教授、パイロット校）

島菌進氏（東京大学教授、日本宗教学会
会長）

櫻井義秀氏（北海道大学教授、「宗教と社会」
学会会長）

【司会】山中弘氏（筑波大学教授）

発表会の内容

本科研の3年間の調査・研究によって構
築されたシステム「宗教文化教育推進セン
ター」の概要について、土屋氏より説明があ
った。戦後、日本宗教学会が宗教教育の問題
と取り組んできた歴史を概説し、そうした学的
努力の上に今回の宗教文化教育との取り組
みがなされたということが強調された。

井上氏は、宗教文化教育を広く進める上
では、社会的に受け入れられるものであるこ
とが大前提であり、また多くの教員によるネッ
トワーク形成が不可欠であるとした。

これにつづいて科研の代表者であり、かつ
日本宗教連合諸学会の委員長である大正大
学教授の星野氏が、この制度は学会として取
り組んでいくべき問題であるという点を力説し

た。大正大学は宗教文化士制度のパイロット校の1つでもある。

本科研は日本宗教学会と「宗教と社会」学会の2つの学会の委員が中心になって研究を進めてきたので、それぞれの学会の会長が、今後の課題について、幅広い視点から提言をした。

島菌氏は、宗教文化教育は世界的に見た宗教学の課題からしても時宜にかなったものであるとし、櫻井氏は、現実の社会問題を見据えながらこの制度を広げていくことが

重要とした。

発表内容に対して、参加者からも質問が寄せられ、土屋・井上両氏が回答した。なお、参加者は75名であった。

成果発表後、宗教文化教育推進センターの設立記念式が、國學院大學学術メディアセンター1階・カフェラウンジ「若木が丘」で開かれた。そこでも、この制度が大学における宗教文化教育の実質化を推進するうえで、どのようなことを考慮していくべきかについて、さらに意見交換がなされた。



成果発表会の様子

* 本科研によるニュースレターは本号が最終号となります。

科研のホームページは当面継続させます。また、宗教文化士に関する情報は、下記の「宗教文化教育推進センター」の公式ホームページで公開されています。

<http://www.cerc.jp/>

科学研究費補助金基盤研究（A）

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

（研究代表者 星野英紀）

発行 大正大学、國學院大學、大阪国際大学、大阪大学

発行日 2011年1月31日

URL：<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>

E-mail：infoshubun@kokugakuin.ac.jp